

名古屋市珉光院の歴史と文化財

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

(よしだ・かずひこ)

吉田一彦

親鸞と初期真宗の諸門流

親鸞は日本の歴史上の重要人物であり、日本の仏教、そして文化や思想に大きな足跡を残した存在としてよく知られている。しかしながら、親鸞個人がどのような人物であったのか、その伝記的な実像となると、史料が乏しく、確たる情報に恵まれず、その存在は茫漠として霧の中に包まれている。もちろん、史料が全くないというわけではない。早く、中世に書かれた親鸞の伝記も存在する。だが、それらはすべてが教団(本願寺教団、高田教団などの浄土真宗教団)の内部の史料であって、教団外の史料、すなわち一般の文書、典籍、記録などには残念ながら親鸞のことは全く出てこない。その活動や思想を外部の史料から跡づけることができないのである。

そこで、教団内部の史料に依拠して親鸞の姿をとらえていかなければなら

ないのであるが、それらの史料には後世からの修飾や創作が少なからず含まれていることもまた否定できず、その実像を復元する作業は困難を極める。

親鸞の生まれや家系のこと、出家のこと、師のこと、妻子などの家族のこと、初期の活動の姿などについては、不明の部分が多く、彼の個人史は謎に満ちている。また、親鸞が関東地方をフィールドに展開した宗教活動は、壮年期の彼の最も中心となる活動であり、その思想の具体的な実践と考えられるが、これについても不明の部分が多く、その活動や思想をどう理解し、どう評価するかは今後の大きな研究課題になっている。さらに京都で過ごしたという晩年の姿やその思想についても未解明の部分が多い。では、どのような研究方法がありうるか。

親鸞自身の姿はこのようにおぼろげなのであるが、その中で、彼が関東地方で盛んな宗教活動を展開し、数十人におよぶ弟子を持っていたことは歴史的事実として確実で、弟子や孫弟子、

そして門流の人たちの活動に関しては、在地の史料からその痕跡をたどることが不可能ではない。そうした弟子や門流の活動を丹念に調べあげ、それらを総合するところから親鸞の活動や思想を復元していくという作業は、迂遠なようではあるが、親鸞の実像をとらえる上で一つの有力な研究方法になると私は考えている。

親鸞の死後、弟子たちは一つの集団に結束して活動するというのではなく、有力な弟子ごとに複数の集団に分流し、それぞれがそれぞれの門流を形成して別個に宗教活動を展開していった。一つの団体ではなく、複数の門流に分かれて活動したというのはこの集団の大きな特色で、このところを誤認してしまうと彼らの活動を見誤ってしまうので、注意をしておきたい。また、この時代は「教団」の時代ではなく、「門流」の時代であった。もちろん、本願寺も存在せず、浄土真宗という宗派も存在しなかった。この時代のこれら諸門流を、今日、「初期真宗」とか、「親鸞系諸門流」と呼んでいる。

性信の横曽根門流

初期真宗の諸門流の中で大きな集団を形成したものに、横曽根の性信の横曽根門流、鹿島の順信の鹿島門

流、磯部の善性の磯部門流、高田の顕智の高部門流、荒木の源海の荒木門流、遠江の専海の三河門流などがあり、これらの門流はさらに複数に分流してさまざまな集団を形成していった。これら諸門流にはもちろんそれぞれの個性があるのだが、しかし、どの門流にも見られる、親鸞系諸門流全般に共通する特色として、①強い移動性を持っており、活動場所を移動しながら発展していったこと、②強い聖徳太子信仰を持っていたこと、③門徒の中核が農民や武士ではなく、職人、商人、運輸交通業者、山の民、川の民などの非農業民であったこと、などがすでに指摘されている。②これは後発的に発生した特色ではなく、親鸞の時代に形成された特色と見てよい。

性信は、伝承では常陸国鹿島の人で、俗姓は大中臣氏、十八歳の時に熊野の証誠殿で夢告を得て、黒谷の法然のもとを訪ねてそこで親鸞と出会い、親鸞の第一の弟子となったという。鹿島の大中臣氏というところ、鹿島神宮の関係者とも想定されるが、性信と鹿島神宮との実際の関係はなお不明である。だが、彼が親鸞の高弟として関東地方で活躍し、親鸞の死後は自ら門流の祖となって活動したことはまちがいない。彼が活動の本拠としたのは下総国横曽根（現在の

茨城県常総市豊岡町）の地であった。

性信を開基とする寺院は報恩寺と号し、横曽根門流の本寺として活躍した。この寺がいつ建立され、いつ報恩寺を号したのかは不明であるが、それが「下総国北相馬郡豊田庄飯沼郷横曽根村」の地にあったことはまちがいないだろう。飯沼は広範囲にわたって続く低湿地で、その中の横曽根は鬼怒川西岸の川沿いの村であった。鬼怒川をはさんだ対岸（東岸）は水海道で、そのすぐ東側にはさらに小貝川が流れている。水海道は、江戸時代、水運関係の産業が栄え、鬼怒川沿いと小貝川沿いにそれぞれ渡船場があり、川魚漁があり、また六斎市が立つて商業が栄えるなど、地域の中核都市として繁栄したという。

報恩寺は、やがて慶長七年（一六〇二）に江戸の外桜田桜川西端（現在の東京都千代田区）に寺基を移し、さらに寛永二〇年（一六四三）に八丁堀舟入町（現在の東京都中央区）に移転した。その後、明暦三年（一六五七）の大火によって、浅草広沢新田にあった浅草御坊（浅草本願寺）の東門の内に移転して広大な寺地を構えたが、文化三年（一八〇六）の火災により現在の下谷の地（現在の東京都台東区東上野）に移って今に至っている。これが坂東報恩寺と呼ばれる現在の報恩寺である。同寺は、

中世以来の文化財を多数今日に伝えている。他方、下総国横曽根の地には寺内の聞光寺が残ったが、文化三年に現在地に報恩寺住職掛所として本堂が再建され、報恩寺の支坊となった。のちにこちらも報恩寺を名のつて今日に至り、やはり坂東報恩寺と通称している（茨城県常総市豊岡町に所在）。横曽根門流は、中世後期に、関東地方から他の地域に展開し、東海地方や北陸の越中国、さらに近江国方面などに伸張していった。

珉光院の歴史

名古屋市中東区平和が丘三丁目に所在する珉光院は、初期真宗の流れを汲む古刹で、中世以来の文化財を多く今日に伝えている。当寺は、現在、真宗大谷派に属しているが、これは後述するように、一五世紀末期に本願寺教団に参入して以後のこととて、それ以前は初期真宗の寺院であった。

珉光院は、寺伝では、開基が善教房慶照という人物で、上州四野尾（現在地不明）の人、前身は武士で、神戸藏人将監といった。のち出家者となって伊勢長島に天台宗の一字を建立、大乘円通寺と号したという。まもなく海東郡萱津の七日市場に移転

第1部

「名古屋と観光」と名古屋学

したが、聖徳太子像を礼拝するため
に寺に立ち寄った親鸞に出会い、親
鸞に帰依して天台宗から親鸞門流に
転じたと伝えている。寺の最初の本
尊は聖徳太子像で、現在、本堂の右
余間に安置されている像がそれであ
るといふ。この寺伝は、後世の潤色・
付会があつてそのまますべてを肯定
することはできないが、その中で、
先祖が関東地方の上州の出身であつ
たということ、最初の本尊が聖徳太
子像だったということは大いに注目
される。

最初の本尊が阿弥陀如来像ではな
く、聖徳太子像だったというのは、
初期真宗系の寺院にしばしば見られ
るところであつて、当寺が初期真宗
の流れを汲む寺院であることを今日
に伝えている。では、初期真宗のど
の門流から出た寺院なのか。そこで
注目されるのが、当寺に所蔵される
絹本着色性信影像（一〇六・二×四
八・七センチメートル）、および絹本
著色鹿島大明神影像（八〇・九×三
七・六センチメートル）である。

前者の性信影像に描かれる人物は
横曽根の性信にほかならず、影像の
顔立ちや全体の造型を観察するに、
東京都台東区報恩寺蔵の絹本着色性
信影像（七六・〇×三四・四センチ
メートル）に酷似しており、その写
しとして作成されたものと見てよい。

また、後者の影像も、後述するよう
に、性信に関する説話に関連して作
成されたものだと思われる。そう
であるなら、珉光院は、初期真宗の
横曽根門流の流れを汲む寺院（道場）
としてその歩みを開始したと理解さ
れよう。

珉光院は、昭和四八年（一九七三）
に、名古屋市中区の小桜町（現在の
名古屋市中区錦二丁目）から現在地
の名東区平和が丘に移転してきたが、
さらにそれ以前は、尾張国海東郡の
萱津の地（現在の愛知県海部郡甚目
寺町）にあった。当寺に所蔵される
絹本着色親鸞影像（九二・〇×四六・
五センチメートル）は慶長二年（一
五九七）の裏書（七〇・六×三五・
五センチメートル）であるが、そこ
には「本願寺親鸞聖人御影／大谷本
願寺釋教如（花押）／慶長二丁年五
月廿三日／尾州海東郡／萱津圓通寺
／常住物也／願主釋秀頓」とあつて、
萱津の所在地で裏書が記載されてい
る。また、方便法身尊像は延徳元年
（二四八九）の裏書であるが、そこ
には「方便法身尊形／大谷本願寺釋実
如（花押）／延徳元年西己九月廿八日
／尾州海東郡萱津／ 圓通寺
／願主釋西善」とあつて、やはり萱
津の所在地で裏書が記載されている。
萱津から小桜町への移転は、元和七
年（一六二一）、もしくは慶長一五年

（二六一〇）のことと伝えている。珉
光院は、萱津から小桜町へ、そして
平和が丘へと移転して今日に至つて
いる。

珉光院は、当初は横曽根門流の流
れを汲む寺院であつたが、それがあ
る時点で本願寺教団に参入していっ
た。では、それはいつのことか。そ
れは、この方便法身尊像が下付され
た一五世紀末期の、西善が住持であ
った時代のことと考えられる。大谷
門流の本寺である本願寺は、一五世
紀後期、蓮如、順如、実如が住持を
務めた時代に、初期真宗の諸門流の
寺院、道場を、集団であるいは単独
で本願寺の傘下に参入させる活動を
積極的に展開し、「本願寺グループ」
とでも呼ぶべき大教団を形成するこ
とに成功した。本願寺は、傘下にお
さめた寺院、道場に対して、本尊と
して方便法身尊像を下付し、それに
本願寺住持の署名、花押を記した裏
書を書いた。珉光院の方便法身尊像
も、当寺が本願寺グループに参入し
ていった時に下付されたものと理解
してよい。当寺は、すでにその時「圓
通寺」という寺号を有していた。こ
うして初期真宗の寺院であつた圓通
寺は、本願寺傘下の寺院になつてい
った。なお、裏書に「横曽根報恩寺
門徒」等の文言が見えないから、珉
光院はその時点で報恩寺の末寺では

なく、独立した寺院であったと判断される。

圓通寺は、その後、一四世住職の從盛が明暦元年（一六五五）六月に東本願寺の宣如から「珉光院」という院号を与えられ、一五世の秀山がこの院号を寺号にして、圓通寺を改め、「珉光院」と称するようになり、今日に至っている。

萱津のにぎわい

萱津は、草津川（現在の庄内川）を船で渡る交通の要所であった。早く、承和二年（八三五）六月二十九日太政官符（『類聚三代格』巻一六）には、「尾張国草津渡」が見え、渡船を一隻から三隻に増やしたことが記されている。この「草津」はカヤツと読み、萱津のことである。中世には、萱津宿が旅人たちにぎわい、市がたち、遊女や傀儡も活動していたことが知られている。「萱津宿」は、『吾妻鏡』『海道記』『春の深山路』などに見え、『東関紀行』では、萱津の東宿のにぎわいが描かれている。また、『一遍聖絵』にも、甚目寺参詣のくだりに「萱津の宿」の徳人二人が登場するし、「尾張国富田莊絵図」（円覚寺蔵）には、萱津宿が描かれている。萱津宿は鎌倉街道の重要な宿で

あり、交通、流通の要所であった。

ただ、「尾張国富田莊絵図」の萱津宿の部分には（ここには海東郡に属した萱津宿が描かれていると考えられるが）、街道沿いに、北から、円覚寺、千手堂、光明寺、大明堂の四つが描かれているが、圓通寺は見えない。この絵図は、一四世紀半ば頃の成立と見るべきものであるが、その頃、圓通寺はいまだ萱津に存在していなかったのだろう。もし存在していたとしても、寺院風の建物を持たず、寺号もない道場だったと見るべきだろう。

初期真宗の諸門流は、先に述べたように、職人、商人、運輸交通業者、山の民、川の民などの非農業民が門徒の中心となっていたが、寺院、道場自体がそうした生業に深く関わっていた場合が少なくなかった。珉光院（圓通寺）の萱津における活動について、直接的な史料には恵まれないうが、渡船、水運など川の民に関連した生業に関わって多くの門徒を獲得し、宗教活動を行っていたのではないかと推定されよう。

珉光院の文化財

（1）聖徳太子像（木像）

当寺の最初の本尊であったと伝え

る聖徳太子の木像。正面向きの立像で、胸のあたりの高さに両手で柄香炉を捧げ持つ孝養像である。初期真宗の聖徳太子像にふさわしい像である。当寺の寺誌である『珉光院の由緒と歴代記』の口絵に写真が掲載されている。

（2）絹本着色性信影像（一〇六・二×四八・七センチメートル）

横曽根の性信の影像。先に述べたように、東京都台東区報恩寺蔵の性信影像によく類似しており、その写しとして作成されたものと考えられる。横曽根門流との関係を示す貴重な文化財。

（3）絹本着色鹿島大明神影像（八〇・九×三七・六センチメートル）

社殿風の建物の前面に、老人の姿をした神を描く影像。神は、あご髭をたくわえ、烏帽子をかぶり、白い衣装を着て、腰をかがめて、やや斜め向きに、上置の上に敷物を敷いて立っている。この影像も、横曽根門流との関係で作成されたものと推定される。報恩寺では、性信の伝記を説く際に次のような説話を語ってきた（以下「報恩寺開基性信上人伝記」による）。承久辛巳年（一二三二）、性信が鹿島の社廟に参詣しようとしたところ、三又江のところで浪が荒れ、

「名古屋と観光」と名古屋学

迅風雷電して船が進めなくなってしまう。彼は、これは蚊龍の仕業にちがいないと察して親鸞より伝来した剣を水中に投じたところ、天は晴れ、風がおさまって舟は進み、無事に鹿島の社廟を参詣することができた。その帰途、蚊龍が姿を現して、首をたれ、尾をふして、最前投げ入れられた剣を性信に返却した。以後、この剣を「龍返の剣」と号するようになったという。この影像是、この説話に関わって鹿島大明神の姿を描いたものではないかと解釈される。だが、報恩寺では、もう一つ、大野（大生郷）の天神が「一老翁」の姿で性信の講法の席に現われて、性信に帰依したという説話も語られている。天神は善知識である性信に帰依した後、報恩寺に鯉を贈るようになり、他方、報恩寺は天神に鏡餅二枚を贈るようになって、それ以来、報恩寺では正月一六日に「鯉魚の会」を開催するようになったという。現在も、報恩寺では「鯉魚料理規式俎開」（二〇〇九年は一月一二日に実施）が舉行されており、大生郷天満宮（茨城県常総市大生郷町）では、報恩寺からの鏡餅の奉納の儀が舉行されている（二〇〇九年は一月六日に実施）。なお、現在報恩寺に所蔵される「性信絵伝」は近世の作品と思われるが、そこには「龍返の剣」の説話とともに

に大生郷の天神の説話が描かれている。以上を勘案するに、珉光院のこの鹿島大明神影像是、鹿島大明神ではなく、天神を描いたものである可能性はないのか、今後さらに検討していく必要があると思われる。

（4）絹本着色阿弥陀如来像（九一・六×三七・〇センチメートル）

一基の蓮台の上に両足をそろえて立つ正面向きの阿弥陀如来絵像。光明は四八条で、真上、真下に突き抜ける光明が見られる。色調はいわゆる皆金色とはなっており、茶系の色も用いられており、また袈裟の文様も截金ではなく、金泥で描かれている。全体に土俗的な作風の絵像であり、京都ではなく、地方で作成された初期真宗系の阿弥陀如来立像と判断される。こうした初期真宗系の阿弥陀如来絵像は、しばしば三方正面阿弥陀絵像などと呼ばれるが、寺では「恵信僧都阿弥陀如来尊像」と呼んできたという。この絵像については、同朋大学仏教文化研究所編『蓮如方便法身尊像の研究』に写真を掲げ、同書所収の「総説 本願寺流真宗と方便法身尊像」で簡単な解説を述べたので参照されたい。

（5）紙本着色道綽善導二僧影像（四七・三×三一・五センチメートル）

向かって左側に道綽、右側に善導の立像を描く二僧影像。二人とも斜め内側を向き、対面するように配置されている。また、二人とも踏み割り蓮台に裸足で立ち、頭部には円光を背負っている。道綽は鈍色の衣に白袈裟を着し、袈裟には鍔が見られる。善導は半金色に描かれ、口から化仏三体を浮出たせ、やはり袈裟には鍔が見られる。これは、浄土教の先徳である中国の道綽と善導の二人を仏に等しき尊格として描く影像であるが、管見では他に類例を知らず、大変めずらしい作品だと思われる。ただし、類似のものとして、三重県四日市市南小松町の中山寺所蔵の善導法然二僧影像が、すでに『真宗重宝聚英』六に紹介されている。同像は、この珉光院のものとよく似た二僧影像であるが、しかし向かって左側に道綽ではなく法然が描かれており、また、もとは対幅像だったものをのちに合装して一幅としたものだという。それでも、二人が斜め内側を向き、対面するように造形されていること、二人とも踏み割り蓮台に裸足で立ち、頭部には円光を背負っていること、法然が鈍色の衣に白袈裟を着していること（ただし鍔はない）、善導が半金色に描かれ、口から化仏三体を浮出たせ、袈裟に鍔が見られることなど多くの共通点が見ら

れる。これは高田派で作成された影像である。これに対し、本像は、も

ともと一幅の二僧影像に作られており、また向かつて左側の人物は一見すると法然のように描かれているが、鑑が見られるところから中国の僧とすべきで、ならば寺伝通り道綽とすべきである。ところで、東京都台東区報恩寺にも、絹本着色善導影像（化仏三体、六五・一×三三・七センチメートル）が所蔵されており、同寺の重要な法物として依用されている。とするなら、横曽根門流では、こうした善導や善導に関連する影像が重視されていたとすべきなのかもしれない。

（6）紙本着色光明十字名号（二〇四・二×三七・四センチメートル）

一基の蓮台の上に「歸命盡十方無碍光如來」の十字名号が籠文字で墨書されるもの。名号からは左右に八条、上部に一条の計九条の光明が放たれ、そのうちの六条に化仏（計六体）が描かれている。初期真宗の寺院、道場で依用された様式の名号と判断される。寺では、これを「覚如上人化仏名号」と呼んできたという。この写真^⑬は『真宗重宝聚英』一に掲載されている。こうした墨書の十字名号から光明が放たれ、化仏が描かれる事例は、長野県、あるいは新

潟県、富山県など中部地方にいくつも見られる。

（7）方便法身尊像（九三・〇×三八・五センチメートル）

（1）（6）が初期真宗系の法物であったのに対し、これは本願寺系の法物で、当寺が本願寺教団に参入した後に、本願寺から本尊として下付された絹本着色の阿弥陀如来立像の絵像である。前述のように、これには裏書（四六・二×二一・六センチメートル）が貼付されており、「方便法身尊形／大谷本願寺釋実如（花押）／延徳元年^{西記}九月廿八日／尾州海東郡萱津／□□圓通寺／願主釋西善」と記されている。本願寺では、延徳元年（一四八九）八月二八日、蓮如が隠居し、五男の実如が住持に就任して教団を相続した。この方便法身尊像は同年九月二八日の日付を持つもので最初期の実如裏書方便法身尊像の現存事例の一つとして貴重である。これについては、別稿に表裏の写真^⑭を掲げて詳論したので、参照されたい。

（8）紙本墨書六字名号（草書体）

本願寺系の法物としては、他に、本願寺住持が書いた紙本墨書の六字名号（草書体）で、蓮如筆と見るべきものが二幅（一つは八一・二×二

七・四、もう一つは八一・六×二七・三センチメートル）、順如筆と見るべきものが一幅（四七・〇×一八・二センチメートル）、実如筆と見るべきものが二幅（一つは四七・一×一八・二、もう一つは三四・六×一五・四センチメートル）所蔵されている。このうち、順如筆と見るべき六字名号の写真が『蓮如名号の研究』に掲載され、青木馨氏によって、タイプC-5の六字名号と分類されている。^⑮ 珉光院（圓通寺）は、本願寺住持が蓮如、順如だった時代に本願寺と関係を持つようになって本願寺グループに参入し、やがて実如が本願寺住持になった後に方便法身尊像が下付されて、正式に本願寺教団の本尊を持つ寺院に転じたものと考えられる。

（9）数多くの文化財

珉光院には、他にも、絹本着色平敦盛母衣名号（五二・七×二八・二センチメートル）、方便法身尊号（一〇七・二×三七・九センチメートル、流入品）、絹本着色親鸞影像（九二・〇×四六・五センチメートル、裏書は前掲）など、注目すべき文化財が所蔵されているが、それらについては他日を期すことにしたい。

第1部

「名古屋と観光」と名古屋学

注

- (1) 拙稿「日本仏教史の時期区分」(大隅和雄編『文化史の構想』吉川弘文館、二〇〇三年)。
- (2) 井上鋭夫『一向一揆の研究』吉川弘文館、一九六八年。
- (3) 性信については、平松令三「高田宝庫より発見せられた新資料の一、二について」(同『真宗史論攷』同朋舎、一九八八年。小山正文「初期真宗門侶の一考察」(同『親鸞と真宗絵伝』法蔵館、二〇〇〇年。今井雅晴「性信坊関係史料——初期真宗教団史の側面——」(『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』一九、一九八六年。同「性信坊関係史料(続)」(『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』二〇、一九八六年。同「性信坊関係史料(続々)」(『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』二二、一九八七年)。同「横曾根門徒の研究」(同『親鸞と東国門徒』吉川弘文館、一九九九年)。
- (4) 報恩寺所蔵「報恩寺開基性信上人伝記」(注3 今井雅晴「性信坊関係史料——初期真宗教団史の側面——」所収)による。
- (5) 報恩寺所蔵蓮如影像裏書による。この影像については、拙稿「大谷本願寺第七世釋蓮如」(早島有毅編『親鸞門流の世界』法蔵館、二〇〇八年)。
- (6) 小桜秀謙『珉光院の由緒と歴代記』珉光院、一九八一年。
- (7) 拙稿「日本仏教史上の蓮如の位置——本願寺教団の形成と初期真宗——」(同朋大学仏教文化研究所編『蓮如方便法身尊像の研究』法蔵館、二〇〇三年)。
- (8) 萱津については、『新修名古屋市史』一、二、名古屋市、一九九七、一九九八年。
- (9) 「円覚寺領尾張国富田荘絵図」は注8『新修名古屋市史』二に複製が付されている。
- (10) 注6に同じ。
- (11) 春古真哉、吉田一彦、小島恵昭「総説 本願寺流真宗と方便法身尊像」(同朋大学仏教文化研究所編『蓮如方便法身尊像の研究』法蔵館、二〇〇三年)。
- (12) 信仰の造形的表現研究委員会編『真宗重宝聚英 六 拾遺古徳伝、法然上人絵・絵像・絵伝、善導大師絵像』(解説小山正文) 同朋社、一九八八年。
- (13) 信仰の造形的表現研究委員会編『真宗重宝聚英 一 名号本尊』(解説千葉乗隆・平松令三・早島有毅) 同朋社、一九八八年。
- (14) 拙稿「実如の継職と初期の実如裏書方便法身尊像」(同朋大学仏教文化研究所編『実如判五帖御文の研究 研究篇下』法蔵館、二〇〇〇年)。
- (15) 同朋大学仏教文化研究所編『蓮如名号の研究』法蔵館、一九九八年。